社会的事実の説明 メディア、アノミー、サイレーン、自殺 ガ・ギデンズと・スメルサー

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者名</td>
<td>池村 六郎</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>静岡文化芸術大学研究紀要</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>なし</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>なし</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2004年3月31日</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1132/00000542/">http://id.nii.ac.jp/1132/00000542/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
そのことは、常に複合的な原因がある。しかしネットを残しネットを利用して自殺する者、あるいは自死について考えると、自死をめぐる社会的で外在的な事実と、前後の状況おそれには、日常の話についてと同様に、まだまだ貧弱な推論の束があるにすぎない。一般に、自己決定で情熱的な説明（の要求）は、現在日本社会ではびこる反知性主義・教養の否定と無関係ではない。

Things or causes are complicated, compound and we see multiple realities; what will be, will be, said a suicide or one taking one's own life, communicated in Internet. Between external social facts and events under our own very nose, there's a bundle of speculations still poor and meager, with suicide as well as with our own everyday riddles. In general, anti-intellectualism or culture-abusing in Japanese people today has much to do with such a demanding impatient self-satisfied explanation.

1）ネットでの共同自殺

メディアは、ギリシャ神話の妖怪サイレーンのように、歌声で魅惑しては近く船乗りたちを溺れさせるのだろうか。

自殺は、現代日本社会の状況を物語るよう増えている。自殺者の数は、かなり前から交通事故による死者の数をはるかに凌駕しており、交通事故死が 1 万人以上と安全対策の成果をあげているのに、自殺統計は数年前から 3 万人を超え、実際の数となるとさらにもういちいではない。自殺防止に、講すべき安全対策はそのためのようである。

自殺者は、何らかの事情により注目される人物か有名でないかぎり、報道されることはほとんどない。自殺が日常の場面で語られるとしたら、現代日本社会での現象云々というような人たちで、統計数字に変えてみてでもある。そのような統計数字に姿を変える前の状態でわれわれの眼前にあらわれたところ、身近近者の自殺か、それとも、偶然に目撃する自殺として、である。最近、ネットによって互いに結ばれただけで、それまで何の関係もなかった人たちが、目撃をした部屋や自転車の中という閉ざされた空間で一緒に死んでいる、つまりは共同の自殺をしたいという「事件報道」が続出した。人々は、どうやったらあたってネット社会のこわさを語り合い、どうしてこのような自殺をするのであらか、分からないなどと語り合ったことであろう。

身近な者の自殺ほど耐えがたく辛いことはない。身近に生じた自殺、あるいは自死については、その（納得できるような）原因を求めて、残された者たちは煩悶するにしも、歳月が過去に回ると、原因究明などどうでもよくなって、ただその死を受けいられるようになっている。だが、報道された自殺や、さらにはそのような報道に刺激されたか誘発されて生じたらしい類似の自殺が続くと、われわれは覚悟を始める。ネットや報道が、原因ではないか、原因でないにしても限りなく原因に近いにちがいない、といわれば血が騒るのであら。血が騒るというメタファーには不謹慎な含みがあるかもしれない。だが、これまでも、何らかの凶行事件に際して、その直前のテレビ番組に暴力面面や疑惑を弄ぶ場面があり、それを見ていたらいい信頼感が現代生活で凶行に及んだと報道されると、多くの人がメディア（テレビ番組）の責任を追及してきた。血が騒るというメタファーの当否はともかくも常に繰り返されている（いわばお定まりの）原因・責任追究の設定である。

あるいは、いわゆる「ネットで共同自殺」については、多くの人は、原因についてこのような短絡した判断をしているかもしれない。短絡的でない判断とは、どんなメディアかそれ以上ででもなければ、それ以下でもないという冷静な判断のことである。いわゆる「自殺を誘うサイト」については、それを報道することもふくめて、自殺者を出すひとつの誘因と考えてよいであろうが、それ以上ではないという認識（あるいは熟慮）である。つまり、そのような自殺志願者は、「自殺サイト」がなければ、それ以後の人生において他の誘因で別に自殺をはかるかもしれないし、その場合には、推定原因についての曖昧な統計数字に埋もれてしまうだけであろう。もっとも、もちろん軽いもの、このようなネット利用の自死は、死のうとする者の最後の自己顕現であるとしても、残された身近な者にすればさらに辛さが増すだけであろう。短絡した判断は広がっていないのだろうか。以下の考察では、そのことには、常に複合的な原因があるのだということ、自殺、あるいは自死は、われわれ
れの日常のほとんどの行動・振る舞いにかかわる問題をどうのだが、納得のゆくような説明をえようとしても、社会的で外在的な事実と、悲惨な眼前の結果のあいだに、一般化されて蓄積的な推論の束、あるいは見方によれば）ただ弱小な推論の束が横たわっているにすぎないということを述べる。

自殺を自死と言い換えたているように、筆者は必ずしも自ら選ぶ死を「自らを殺すこと」とは考えていいない。なるほど、われわれの会尊重の実在は、自分を殺すために、いったい著者をまきこんだような事件が生じているとしても、あらゆる自死が「自らを殺す行為」と呼ばなければならないわけではない。

古い時代でなくても、日本社会ではある条件の下では自己の命を絶つことを称える習がある。古い時代なら、武士にとって切腹は、ただの腹切れでなく、いたけれども回避できない形であったし、胸中で謀略を描かれた心中とは、そもそも心をとつずにしのぎつつ振り子の台に乗る、裏切りのない状態（互いの死こそ、その最高の担保）ということであった。今日でも、母方から心にたちるのは悲しめても、そのような死を許らなかったのが日本社会での伝統的でそれなりに支持されてい

2）ものを過程として、まずは把握しよう

自死／自殺には、それへと至る過程がある。マスヒステリーや統合行動については、それたちと直接的な誘因を、概念的な次元に約束して整理し、価値付加過程として理解しようというアプローチは、そのパーソンズ的な概念枠組みについて保存するならば（さらには、決定論的な単純さへの配慮をともうならば）妥当な考え方はあると考える。目下の筆者は、経験的な議論よりも妥当な議論は好んでいる。論理的に混乱していないなら、なお結構である。さらには、真理である。あるいは、真理の強さは、われわれの求めると考えることはできない。多元的な現実を生きるわれわれにとって、日常生活の世界は、土に至る現実を提供しているわけであるが、それを一つの単純化に基づくのではなく、理に沿って自死した者や薬物中毒の果てに断絶を自死を中毒者について、その真の原因について考えることであろう。

他者の行為について、われわれが信じ込んでいる暗黒の前には、21世紀と19世紀（あるいは、それ以前）が混在しているようであるが、無意識の事情を探りあげながら、無意識的領域について、それを探しようにはいても物質的な観をそして、石炭と石油のように操作的に処理できるという思い込みである。J・D・ダグラスの説やギゼンズの説をともにあげると以下のようになる。

①われわれのすべての行為は、社会的に大なり小なりそろ込まれているような「意味づけ」によって紡げられる、あるいは動機づけられている。

②他者の行為は、理解できるか、知っているか。

③行為の意味は、物理的な変数と同じように数的処理の対象となる。

④われわれは、人間の自由な意志を信じ、それぞれによって政治やその他の様々な組織や制度の根本理念を理解し、自由な行動については、馬鹿である決定論者となる。もっとも、決定論といえども、哲学的な知識を知らず、われわれの日常の推論では、相対的にそうなりやすいと表現する方が実際であろう。
社会的事実の説明 — メディア、アノミー、サイレーン、自殺 —— A・ギデンスとN・スメルサー ——

熱狂をされている。だが、バンクによれば、列
強の脅迫下におかれていたかつての中国で、
自死が急激に増えたという(4)。バンクの文脈
から想定すると、当時の中国の都市社会では、
信頼体系の瓦解・弛緩・分裂といった、いわ
ゆるアノミー概念の格好の適用例が生じてい
たようである。おそらく単独に（普通には）他
者との交渉や相互刺激もなく行われる自殺と
いう行為にも、集団的な観点でとらえられる
面がある。

ちなみに、以下の記述で、アノミー概念に
言及するが、規範のない状態という直訳では
誤解を生じるだろう。価値観や（おおむねそ
れに準拠して形成されている）日常の規範は、
決してすっかりなくなってしまいないからで
ある。ある価値観や信念体系が、急速に支持・
信奉を減衰させることはある。その場合、何
かのかの価値観が入り込んでいるかもしれません。
新旧の対立、入れ替わるの事象としては、
敗戦後の日本社会などがそのような例なる。
対立葛藤のアノミーであろう。さらには、敗
戦日本のような例は、一夜にして入れ替わっ
たような急激な変化であり、急性のアノミー
と呼ぶものもいる(5)。次第に、社会の価値観が
緩慢に支持や信奉を喪失しつつ、新しい価値
観や代替の価値観が現れないこともある。性
をめぐることや、死をめぐる問題では、民俗
的・宗教的な支えを喪失して、それに代わる
ような納得の説明が現代日本には得られていない
ようにあるから、このような慢性のアノミー
の中に生きている。集団や社会の規模につい
ても触れておく。社会全体として、あるいは
は規模が大きな集団において、価値観や規範
の緩み、支持・信奉の減衰が生じるだけでは
ない。何らかの相対的に小さな集団や個人的
な場面でも、喪失・減衰状態は本当に生じる
のである。集団のモラルの低下はそのような例である。
しかし、ひとりの個人については、もやや、個
人内面化の問題として考えるべきであろうか
から、個人のアノミーのような概念化は立て
ないでおこう。

デュルケム「自殺論」の、その限界や古典
的な位置づけについては、ここでは問題とし
ない。この古典的な研究については、前記の
いくつもの著作があるので、それを参照され
たい(6)。デュルケムをめぐるギデンスの所
説は以下の記述では直接の言及をしないが、
社会像について多くの示唆を受けていること
を記しておく(7)。

一般的な社会学的自殺論を紹介しつつ、自
死／自殺へと至る過程を考えよう（なお、以
下的文章では、慣用になったり、なるべく「自
殺」という表現で統一しておくが、時には、自
死を含めて「自殺」と言及することもある）。

自殺は、その社会的な前提条件、あるいは
準備状態（＝自死へと送り出す非個人的な、つ
まりは社会的な傾向）と、直接的な動機付け
（＝自死へと誘い出す要素）の足し算、あるいは
は掛け算で生じる。もっとも、このような表
現であり、算数や数学での正確さを期待させる
だろうから、数学的な混和の方が、まだも社
会論的メタファーかもしれない。

ここでのポイントは、その社会的傾向条件
（＝自死へと送り出す傾向）と、直接的な動機
付け（＝よく使われる概念としては「促進要
因」あるいは「誘因」である）とを区別して
考える必要があるということである。促進要
因としては、子供だと、環境ストレス、例え
ば親の叱責などの家庭的なトラブル、友人関
係のトラブル、若者たれ受験や恋愛などの個
人的な悩みなどが挙げられる。実際にはこれら
は複合的に絡みあっていることが多い。社会
人だと、仕事上の悩みや家庭問題、老齢だと
病気や身体の不調などである。

複合的に絡みあっていてるであろう述べた
か。これはさらに含意がある。検死官など
による動機付けの解明と記録として残される
資料は、実際にはその時代や地域における理
解の「はまる型」にそって取捨選択され記述
されやすいということだ。動機の探求からは、
より深い理解に進むことができるかもあ
る（後述するように、「はまる型」に流し込
んで「理解」が共存されていなかった）。
言葉の響きにも「殺意」の弗しさ含んだ「自
殺」となる。

社会的な前提条件が急激に現れている状態だと、
直接的な動機付けが低くても自殺を図るし、
前提条件が低いと、直接的な動機付けが高そ
うに見えても、自殺には至らない。つまりは、
おそらくから観察して、個人にストレスがき
わめて高い場合でも、死なない人は（死なせ

41

国立文化庁大学研究紀要 VOL.4 2003
ない社会では何たか死なない。条件をふたつに分別して、それらの掛け算で考えたと考えるか、どちらか、ほとんどの個人的な条件のみでの自殺もありえないわけではない。精神的な乱乱の働きによる自殺は、そのような場合の典型といえよう。ただし、麻薬乱用などによる自殺だと、どうして麻薬に染まったかという点に関して、あきらし碎けて、決して論的決論がいれは可能になると言いたいわけではない。

もとより社会的な前提条件について、一般的と考え方を、私の理解でまとめれば以下のようになる。

社会について、ふたつの面で把握してみる。これらふたつの面しか見えないというわけではないが、見通しをよくするために、ふたつの面に抽象化して捉えわけである。ひとつは、諸個人が結ぶ人間関係の網の目、あるいは言葉換えれば、「（発生から）結果として現在の関係性の網の目、自発的に結ぶ網の目である、（法執行や権力創設など）諸個人との関わりについては、このような網の目という形でのみ推し取られるわけである。もうひとつは、諸個人が行動する際に意識的に、あるいはもっと近くの時間においてあまり意識せずに、いやまったく意識することに欠けていて、価値基準や規範である。いずれも、集団的・共同的でありながら、個々の振る舞いの中で、ニュースにとどまった変容や変形をもたせていく。

これらふたつの事実の面において、いずれか、あるいは両方とも「過度」となると、自殺への前提条件を高まる。かつての集団本位の社会や、閉鎖的で強権的な社会を思い浮かべればよい。そこでは、諸個人が結ぶ人間関係の網の目（その多くは、人間間の制度化された結びつきである）や、価値観（価値観に応じた）規範の内在化が、あまりにも高いので、さらに条件がそろうと、（身分に応じた）面の出来とそれに迫る追及など、当人が覚える自殺を奨励され、あるいは義務感情が働いて自殺、あるいは自殺をすることになっただけで、かつての日本の殉死や切腹、あるいは犠牲的な死がそのような自死の例である。現代でも特に多い「家族の中心」などは、このような「共同の自殺」である。

逆に、社会的に巡りだた状態、つまりは人間関係の網の目が浸食となり（バラバラな諸個人、アホト化した諸個人という光景を思い浮かべていただくよう）、価値観や規範の内在化にも不具合が生じるとどうなるか（一方、成功か逆にあおられながら、他方、失敗か挫折についての「納得」の図式をあたえているといたような場合である）。このような状態が過度に進行すると、諸個人は失意や失敗をひとりで抱え込む。もとより失敗、あるいは離婚して、それから逃れるための孤独で個人的な選択として（引き留める「見識・慰謝」の目も少なくて）自殺を選んだりする。ちなら逆離婚による自殺は男性が多いとされていられる。

家族自制位に、それが過度であることと、他の致命的な条件が重なる場合、中心などの「共同の自殺」をもたらすが、そうでないかぎりは、寂しくなるような自殺を防ぐだけである。もはや過不足とともに、良くも悪くも諸刃の刃となる例であろう。さらには、社会的な価値観や規範が斜めでは、（＝アノミー状態の社会で）、生存の方向付けを失う、自殺を増やすだろう。もしくは、人間的な結合つつ、網の目が少なくなる関係性も好ましくない。さらには、価値観や規範の逃避や乱れ（対立や競合・姦詐）、つまりはアノミー的な状態でいうことになると、後述するインセンティブ事件などアメリカ社会での事例のように、成功目標に強い迫りまでの志向性が高くて、それゆえに日常的規範の逸脱や日常そのものの基礎の破滅をもたらしたりすると、さらに自殺への前提条件は高まるおそれである（もちろん、多くの人はそうさせて死んでもないらしい）。

すでに述べたように、生理的・心理的なトラブルをまったく無視するわけにはゆかない。説明を生じては困るが、一般によく言われる例としては、精神自殺、薬物中毒による破滅的な自殺があるだろう。見方によれば、アルコール中毒による病死は緩漫な自殺だと考えることもできるし、個人的には筆者としてはいる人の病死をそのような例であろうと考えている。季節的な要因もあって、季節の変わ
3）社会や集団の類型論の試み

参考までに、ひとつ前に流行ったような図式的な軸を横軸に並べて、社会的な類型化をしてみよう。それぞれの極端な常態（Ⅰ～Ⅳ）が、自殺への前提条件となるのを想像してもらいたい。（詳細な議論を展開するのは別の機会にしたい。）

この図での「規範的に…」は便宜的に価値観の面を示しており、I. II. III. IV. は、ある社会や集団において、それぞれの側面や要素が極端になった場合として図示してある。これに考えれば、①からは、それぞれの側面や要素が相対的にややかなる場合としてある。

I. のような社会や集団だと、一挙子一投足がいわば見張られているようなわけだし、観察すべきルールでも同質性が高い。部族的な集団であり、外部からは種族や強権支配のように見えながら内部の者たちは指導者や権威を称えることを心底信じているようにも見えるし、事実、そうであろう。II. らのような社会だと、同じような振る舞いを行う一方で、他者への対応や他者との歩調は必ずしも一定でない。攻撃者は振る舞っているようにも、同じ方向を目指している（価値づけられた目標や選択すべき手段などについての合意が高い）。III. のような社会だと、感受性で人々は互いに歩調が合わず、しかも、合わない歩調を合わせようという作用もあり難しい。IV. はそのような社会だと、人々の考えや感じ方はバラバラなのに、同一調で同じ方向へと向かえる作用が強力で、従わなければ社会の外へ弾き出されることになるが、ふだん、関係性の強さゆえに社会や集団が維持されているだけで、そこに生きているかぎりは、とくに違和感もなく、いわば居人の平和を享受することになる。

日本社会の中にも、地域や階層でこれらの型がそれぞれ見られるようである。とはいえ、地域ごとに強引にあてはめない方がよろしい。ある県民が皆、同じ類型に属していると主張する人、そのような特質だけを現実のその県の（見出した）住宅たちから選択的に認知しているに過ぎない。社会階の交叉については言うまでもなく、現代社会では諸個人は、複数（多数）帰属状態であり、ある集団に属している行動範囲には、ある類型で行動するのを適切だと判断してそのように振る舞い、別の集団に属している時間帯では、別の類型で振る舞うのを適切だと判断してそのように振る舞っているだろう。しかも、適切と判断しているのはその当人であって、ふたつの集団での振る舞い方からもた
An Explanation of Social Facts — Media, Anomie, Seîrenes, Suicide —— A.Giddens and N.J.Smelser ——
4）積みあげられてゆく毒

前に述べた「現代日本の都市に住む、高齢の離婚男性」に戻ろう。
このような男性が、「自殺サイト」を覗いて疑似仲間と一緒に死んだとしたら、あるいはテレビ番組で自殺現場を見て縄死したとしたら、まわりの人々は、自殺の原因を「自殺サイト」や「そのテレビ番組」だと決めつけることになるだろうか。このような男性の「事情」を知っておれば知っているほど、答えに窮するはずである。だが、「事件」が発生すると、たちまち多くの「変数」を考慮の外に投げ出した意見の方が声高に聞えてくる。

価値付加過程（value-added process）については簡単な述べにとどめよう。価値付加と名付けられた過程とは、自殺へと向かわせる社会的な毒が積みあげられてゆく過程のことで理解していただきたい。すでに述べたような要素が、どのように付加過程で積みあげられてゆくのか。肝心そのような過程について、筆者には計算式を提供するだけの用意はない。スマルマーの（社会現象ことごとに詳細に示された）図式を適用したとしても、今日ではもはや紹介だけの魅力がないかもしれない。その図式とは、たとえば以下のようないような項目を①から⑨へと水辺軸に並べて、行為を潜在的状態から顕在的結果へと算出する図式なのだ。これは新しい数値化決定論という学説を受けることになるかもしれない。それでも、これらの項目が、われわれの留意すべき項目であることは確かである。

①価値観や規範の揺ざぎ
②それらの要素の、たとえば新旧の葛藤
③価値観や規範の対立（というかたちをとった実は利害の関係）
④価値づけられた目標と達成の可能性、現実にそれを達成するうえでの可能な手段のバランス
⑤ある個人がたまたま置かれている状況の確さ、便宜提供の度合い、機会平等かどうか、人間関係の網の目にかかわるあらゆる課題

自殺、あるいは自死をめぐる原因追究・追究という観点からは、これら大状況の問題からある個人の周辺の問題へと、チェック項目を並べてゆくことになるだろう。

価値観や規範という項については、その統合性や矛盾・対立について、安易に断定するのは禁物である。矛盾や対立のように見て、そうでないことが多いからである。現在の日本で、女性の社会的進出をめぐっては、保守的立場の政治家からの「家庭に帰り／家庭を守れ」という意見があり、当然それらを支持する街角の意見もある。だが、これらは、実はそのような進出で窮さされるかもしれないという危機、つまりは利害・権益を懸念する側と、潜在的に脅威となりつつある側との社会的葛藤にはかかわらない。価値観や規範の対立のようによく出されているけれども、そうではないだろう。信念体系の対立、あるいは理念や価値観の対立と見なされたり、時には道徳的堕落という非難がなされたりするけれども、そこには利害・権益をめぐる争いが隠蔽されている。

古い世代の男性たちと、社会進出を目指す（ある部類の）若い女性たちは、実際には価値観や規範という面で矛盾・対立しているばかりではないだろう。社会的認知と成功モデルの追求という面では、同じ平野を共有しているのかかもしれないのだ。むしろ、後述のように、他の部類の若い女性たちや一般に親近な若者たちの方こそ、年長者にとっての矛盾・対立の軸を多く抱えている。

以上の項目は、見てのとおり、社会にとって基盤的で一般性の高いものから、個人にとって個別的で変化しやすいものへ
と配列してある。だが、これらが互いにどのような連関をしていますかについては、もはや語りえない。ほとんど常識的な、次元・位相の差異をもとに、並べるしかできないのである。だが、指摘しなければならない問題は、繰り返すようだが、別なところにある。

社会は、常に単なる價值観や規範で営まれているというような思い込みが今なお抱かれているのは実に不思議なことである。理論的にも現実感覚としても奇妙である。対立する葛藤は常にあり、実際にはあった。われわれは個人的に悩んだりすると、かつての人々は、どうして錯乱もせず、死ぬにも斡らす過ごせたであろうかとノスタルジアに耽ったりする。だが、少しでも歴史を振り返れば、これこそわれわれの思い出であって、そのような安定した時代があったという前提こそ、寄連もここに想されるがいそれがいかなる。なぜか、そのような「想い」を、当たり前のよう

に理解しあい、眼下の衝撃的な事象を説明しようとして、それができないと八つ当たりのように「何か」を攻撃する。このようなことこそ、われわれの時代の特色かもしれない。

そのような「何か」が、この世のものでなく悪意や物の怪であった時代ならば、この世とあの世との隔絶性でもってわれわれの意識は向きを変え、すべては一件落着であったろう。だが、この世の中に、つまり不可解なわれわれの世界の中に悪意や物の怪を求めて狂奔するのは、ブッシュのアメリカだけではない。われわれ日本社会にも、そのような余裕のなさが忍び寄りつつある。

素人の直感で述べれば、この社会が今日かかっている何よりの問題は、社会に当然存在しているはずの能動的な対立・矛盾を、社会の原動力として生かせていないことにあるよう。思い出してもらいない。生産性の乏しい旧脱と、凝集力の高い都市のあいだには、対立・矛盾がなければおかしい。それを、ないかのように思わせることの適性は、かつての日本社会にもあったのであろうが、そのような部分適性、というより狭い見方での地域にとらえてはならない。適性の適性を、もはや維持する必要はないだろう。部分適性と全体適性の一致という神話の空、にほかならない。われわれの周囲でも、異質な要素を見たくもない（気の合う仲間だけで固まりあう）という発せ衰える心性がそこかしこに見えている。

子供が気の合う仲間で同じで日頃から横目でいたのは、微微笑ましい情景であるけれども、中高年の見識をした者たちが、仲間うちは他者を排除して固まりあうのは、醜悪である。だが、自分の子供の中で、矛盾や対立のない幼児的な「平和」を、（幼児ではない）オトナの我知で理解しようとする者が、口先では、なにやらひと時代前の「進歩的な」意見を開闘したりする。

世代間や信念体系についても、対立を受け入れ、認識することこそ、必要なことであろう。世代間の接触頻度の低下は、別々の信念体系の余地をはぐくんでゆき、また、生じたかもしれない軒轅をも低減させている。認知的不協和の困惑に陥ったりたくないので、メソポタミアの昔から年長世代の常である。だが、多くの若者の生態が変貌しつつあることを甘受した方がよい。競争情熱の乏しくなった若者に、競争情熱を喚起立てるための場を設けてやろうとすべきではないらしい。まさに要らぬお世話の焼き豆腐、であって、筆者の世代のように競争せよと強制してもダメらしいである。かれらは、この社会の危機的状況を予感して当然何する気がなさそうに見える。しかし、好きなこととしたらしい。よく知られたただが、日本経済のかつての花形産業・鉄鋼の売り上げに対して、その後の売り上げ、それが漫画やアニメといった受験座夏は対極にいるような人々が成し遂げつつあることである。このような人々にとっては、他者との競争が生きる意欲の燃えているわけではないのである。かつての世代にとっては適切であったような心性も、別の時代には少しも適切でなくなる、これこそ、われわれが知るべきことなのであろう。

5）説明には、はまる型がある

この社会には、それぞれ地域バレーン団集でされ、あるいは全体としての日本社会である（ちなみに、マスメディアが、そのような大分の社会を可視的にしているのだが…）。
どんな社会にも、役変わりということがある。
英雄・悪漢・馬鹿・道化者・見物人・評論家・
悪魔や化身といった役変わりである[11]。企業
である役所や組織であれ、大学であれ、
人が集まっているところでは、関
係性の持続と密度に比例して、それぞれが割
り振られてゆく。もし、英雄が欠けたなら、だ
れかが英雄か、英雄もどきにならなくてはな
らない。道化が欠けたら、欠員補充で、虜め
られるような役変わりを誰かが引き受けさせ
られ、あるいは、そのような道化役ゆえにだ
れもが気づかない問題を、意表をついて指摘
することになる。英雄的な人物が英雄になる
というわけではない、道化的な物が道化にな
るというわけではなくて、そのような役まわ
りになった人物が、そのような人物像に「は
まってゆく」という発想が、この考え方の妙
味である。半の真実があると考えるか、それ
tも、まったくの真実だと心感するかは、好
みに任せしかねないので、血液型という体
の知れない分類と予言についての、俗信や、
その影響力を考えると、この考え方には、す
いぶんと学んでほしいところがある。

和歌山の様々な毒殺事件では、女性容
疑者は希代の悪女という役割でマス・メディア
に登場していた。筆者も、この容疑者の顔貌
にはいかにもそれらしいという印象を持た
が、これこそ、曲を作って、「松本サリン事
件」の第1容疑者は、いかにメディアによって
それらしい雰囲気で登場させられていたかを
思い出すのがねばならない。筆者は、正直に打
ち明けるが、この黒幕被害者に対してナイヴ
に、メディアの定義づけ通り、疑いの目で
見ていた。和歌山の毒殺事件の容疑者にも
どうか。この容疑者の顔貌への好意を別にし
て、われわれ聴取者の内心の深さあたたかち
で、悪相として認識されていた。ワイド
ショーでは、このようなご騒音がない場合には
は、憎まれ役の女性タレントを賞味期限が切
れるまで、「また、出ている」という聴取者の
当初の反応など計算済みというように、繰り
返し登場させて、聴取者を屈服させて、所期
の目的を果たしている。このような悪女・悪
婆・毒婦をめぐる言説は、明治の初め頃の錦
絵新聞などで、ほとんど定着的に、と言って
いいくらいの間隔で繰り返し登場しているよ
うである[12]。少し違い時代の類似例を振り
返ってみると、われわれも正気に返るにちが
いないが、これから錦絵新聞を見ることなど、好
事の楽しみしかしないのが残念である。錦
絵新聞に現れているのが、ほとんど昔話やグ
リム童話の登場人物のような存在感のあるの
にくらべ、テレビ時代に変わった「われわれ
の期待と、メディアの提供」のものは、生々し
くて、われわれの守るべき日常生活にとって
直接的脅威であるべき存在感を示しているよ
うである。

だが、テレビ・メディアは、むしろからもそ
のような悪婆や毒婦、道化者や化身の類に数
えられてつつあることに気づき始めているだろ
うか。かつての社会なら、マス・メディア以外
にも、メディアの多様性は保たれていたし、な
により、人間関係というチャネルもまた多様
であった。姉妹兄弟は多く、叔父叔母もまた
多く、近隣の人间関係は煩雑というような
ような濃密さで、時には干渉が乏しくある
ような「社会」があった。それ自体としては、
自殺への「濃密さゆえの前提条件」となりか
ねもないような、関係性の過密さ、あるいは多
様性があった。その勝ちゆえに引き受けなくな
くてはならなくなった困惑を、テレビ・メディア
(とそのチャネル)もまた味わっている[13]。

6) むすびに

社会には、実に多くの配役がある。人々を
突き動かし誘う様々な要素がある。自死をも
たらしたかもしれないメッセージ、それを媒
介したとされるテレビというマス・メディア
やインターネットという新生のテクノロジー
は、そのような多くの要素のほんのひとつで
あるに過ぎない。現代社会では、独り勝ちを
している要素である。多様性が失われつつあ
るらしいのは、まさに危険なことだと考え
てよい。独り勝ちのおかげで、日頃は愛され
ていながら、時には現代の「魔物」のよう
に尊びられたりする。

だが、われわれは、可視的な「何か」にの
名、目を奪われてはならない。論じる機会が
できなくても、論じる必要はなくならない。
論じられなければ、あまりに多様な要素がそ
こにはあるからである。「怪力乱神を論ぜず」
という戒めを現代的に読み替れば、「悪魔」をこの世の中に見ようとすることについて、あせはまる。

テレビやインターネットは、ただの道具でしかない。それを扱う人々も、ただの人である。しかし、「性」、相交し、習えば、相連し」というように、人々が持つ関係性や信念体系系や価値観などの隔離・隔離、そこそこに多くの毒が発生させよう。異なる他者の反感情想、懶惰、不愉快・憎悪、怒りなどは、互いの関係性の見直しを迫り、新たな関係性の構築へと誘うことも多い。コミュニケーションにとって、否定的感情は決定的に有害無益ではない。否定的感情そのものではなく、むしろ否定的感情が抑えられ、チャンネルを失うことなく、毒を生じさせる。われわれは、そのような毒のことをまったく知らないわけではないが、毒は、人々が持つ関係性やその価値観の数だけ、多様で多様で相互に運ばれているので、話しれないのである。話しれないなだけであると、思うす言いたくなったが、そこで言うってはならないだろう。

このことは、常に複合的に生じている。ネット利用の共同/集団自殺、あるいは自死について、インターネットの検索が囲まれ、それと報道するテレビなどには自殺せよという意見が寄せられる。だが、自死をもくめる社会的で外在的な事実と、眼の結果のあいだには、分からないことが多数ある。あるいは、このような問題はそもそも分かりえないことかもしれない。分からないことに対する性質的な答えを求めめる人々の不安はもっともであるが、自己満足で性質的な説明（説明）は、現在の日本社会には起こる反知性主義・教義の否定と無関係なのである。たとえば、筆者が期待するような教義とは、分からないことには分からないと応え、見つからない、いわば時代に対して控えめすぎて売上げには結びつかない、反時代的なそれであろう。それでいいと、言うのみのである。

1 モーリス・バンマ「自死の日本史」竹内哲夫訳・ちくま学芸文庫（読解のいないように言いつつあるが、筆者のフランス人は、そのようなキリスト教的教義からは自由である。）